

小樽へ移住して来られた方々との懇談会（第1回）

- ・日時等平成20年8月12日（火）16:00～17:30
- ・場所市役所本館2階市長応接室
- ・出席者○小川勝規さん（31歳、人力車の「えびす屋」小樽店店長補佐）
○菅原昭彦さん（64歳、NPO法人北海道職人義塾大専務局長）
○外沢照章さん（65歳、能面作家）
- ・司会おたる移住・交流推進事業研究会監事東田朋己
- ・研究会役員等出席者
中松会長、赤間副会長、小笠原理事、藤田監事、山崎市総務部長（オブザーバー）
事務局：貞村事務局長、阿部事務局次長、山崎庶務係長



- （中松会長） お盆前の大変お忙しい中、また大変暑い中、お集まりいただきありがとうございました。
- 私は、「おたる移住・交流推進事業研究会」の会長を仰せつかっており、現在、どのようにして移住や交流人口の増加を図っていくかということについて議論しています。
- ご存じのことと思いますが、小樽市の人口は、昭和39年に20万人以上あったのですが、現在は14万人を切って13万8千人前後という状況であります。
- 2007年から、定年退職を迎えた団塊の世代が増えてくるというようなことで、なんとかこの団塊の世代の皆さんに小樽にお出でいただき、あるいは小樽に移住いただかなくても、交流人口としてお出でいただくことはできないのだろうか、こんなことを踏まえて研究会の事業を進めています。
- こういった中で今日お集まりいただいた、小川さん、菅原さん、外沢さんにつきましては、小樽以外から小樽においでいただいているところでございますので、忌憚のないご意見をお聞かせいただけるとありがたいと思っています。

- ① 「小樽に来る前に描かれた小樽のイメージ」と
- ② 「小樽に来ることとなったきっかけ」を教えてください。

(小川さん) 小樽に来たのはちょうど3年前で、人力車の仕事でこの地に住むことになりました。僕は大学の時からずっと北海道で、本州の神奈川県から移って来まして、以前は札幌市手稲区、その前は旭川方面でした。北海道という土地は、「のんびり自然に」のイメージがあって僕は好きです。むこうのごみごみしたのよりいいかなというので、こっちを選びました。小樽に対してのイメージはやっぱりレトロな街並みが残る、雰囲気のあるまちなんだろうというイメージの中で、この観光業としてこちらに来たのですけれども、やはりイメージに合う街並みは残っていたと思います。



逆に古いというか、レトロな流れの中で、その流れのまま止まってしまっているところもありますね。小樽のいいところは、当時の新しいのものを取り入れる力が強いまちだと思うので、それが今はちょっと弱いかかと、最近そういう印象を受けています。ただそういう意味では、港町という流れが一番強い中では、一番期待が持てますし、一番愛着が湧く人柄のある街なので、僕は住んでいて楽しいです。

(菅原さん) 私は損保会社の社員で転勤族でした。昭和58年に室蘭に来て、平成2年3月まで北海道にいました。実家は仙台市で、小樽には住んだ経験はなかったのですが、何回か遊びに来ていて、落ち着いたというか、昔風のいいまちだなと思ってました。それで、終の棲家ということで、北海道のどこかに住もうとは思ってましたが、うちの家内の力もだいぶあって、小樽に来ました。



きっかけは北海道に転勤した経験が一番ですね。平成12年から住んで丸8年になります。ただ、古いところがずんずん壊れていくのが寂しい感じがしますので、これからはもっと残してもらいたいなと思ってます。

(外沢さん) 私は小樽に移住してから丸5年、女房と娘2人いますが、小樽を知ったのは長女が卒業旅行でこちらに来て、自分の希望する職業があったということで、急遽東京に決まっていた就職をとりやめて小樽に来たんです。これが北海道を開発するきっかけですね。そのとき私は横浜に住んでいて、それまでは全く知人もいませんでした。

それから3年後に次女が、やはり長女のところに仕事をしに行くと言って、そのまま居着いてしまっていて。二つ違いですが、私の子供が2人とも小樽で仕事を始めた、というのがきっかけでございます。



それから間もなく、長女が結婚して子供ができ、その辺から女房の腰がちょっと軽くなってきて、1か月に1回くらい小樽に来るようになったんです。

当時私は開発の仕事でいろいろなところに出張をしまして、女房1人を家に置いておくことは危ないし何かあった時に困ると思い、子供の所に行かないかと聞いたところ、両手を挙げて「はい」と良い返事が返ってきたんです。しかし、実は半信半疑でして、女房は山口の生まれなものですから、日本海ということで多少は雪を知っていますが、豪雪の経験がなく、1年くらいで帰って来るなど半分期待していましたが、もろに期待が裏切られました。3年位してから、子どもたちの家に居候ばかりしているとまずいので、中古の家を買って、逆に子供たちを呼んで2世帯住宅で暮らすことになったんです。おかげで当時私は、50歳を過ぎてから8年間くらい独身でした。何時に帰宅しようが関係ない。どんなに飲んでも関係ない非常にいい生活をしておりました（笑）。

実は、私は8人兄弟の末っ子で兄弟が全て東京にいまして、定年が近くなりまして、私が「小樽に越すかもしれない」と言ったところ、「ばかだね、どうしてあんな寒いところに行くの」とさんざん言われました。だけど、私自身は日本はどこに行っても変わらない、アクセスを考えれば4時間くらいで行けるので、そういう点では、自分の住みたいところに住むというのが一番良いのではないかと。しがらみを断ち切るのは大変ですけど、それとて、ある程度枠の外に出てみれば、しがらみの大切さや無駄がいろいろ出てくる訳ですから。その辺を整理できたのはうれしいと思います。

小樽へ来て、こういう趣味を持っていたものですから助かっています。3年くらいこつこつコンテナハウスで能面を作っていたのですが、3年位ですわ我慢できるのは。そのうち人との関わりが必要になってきます。あまりモグラ生活というのはできないですね、人間というのは。

人との関わりで、どうしたらいいのかというのが悩みでした。同じくらいの年代で話しを理解してもらえるとという点では、新しく求めるのは環境も違いますし、私のようにサラリーマンでも技術系でやってきた人間はなかなか少ないですね、その点探るのが難しいです。

それで、逆に趣味の方から探していこうということで展示会をしまして、いろいろお話しをして、そこから繋がってきたというのが現実でございます。

今は、「小樽散歩道」というWEBサイトを立ち上げてもう3年になります。北海道新聞さんの移住のブログにも選んでもらって、それも約3年になります。そんな格好でいろいろと人との繋がりができて、それがものすごい小樽に来てからの財産になってます。

(司会) どうしても身内などからの「雪が大変なのではないか」「一生住むところなのか」といった対外的な評価と葛藤する場面がでてきますね。移住を検討している方々は、それぞれに「行ってからどうなんだろう」という部分が大きなハードルになっていると思います。

③ 「移り住んでみてからの、以前描いていた小樽のイメージの変化」はありましたか？

(菅原さん) 私は別に何もありません。雪のことは北海道に住んでいたからそんなに心配はしませんでしたし、住んでみてイメージがそんなに変わったことはありませんでした。

(外沢さん) ものすごくうれしい話なんですけども、これだけの歴史的なまちでありながら、逆に非常にエリアが狭いですから、本当に小樽の市街地にいますと、交通アクセスが非常にいい、快適なのは事実ですね。

雪に対しては、確かにもの珍しさがあって、よく雪かきをしていると、「そんなにやる必要はないだよ」とか、「雪が楽しいんでしょ」とか言われますけど、実はそうではなく、雪は、たまたら後でエライことになるので毎日やっているんです。けど、そんなわけで雪も楽しく過ごしています。それで、やはり一番気に入っているのは、交通アクセスが非常にいいことです。高速道路も通っていますし、札幌まで電車で30分です。そういう点では、「かくれ部屋の小樽」じゃないかな。

(司会) 「かくれ部屋の小樽」、これは非常にいい言葉ですね。ちょうど雪の話が出ました。人力車のえびす屋さんは、雪をどうするのだろうと想像していましたら、冬もやるんですね。その根性にはびっくりしたんですが、3年たった小川さんは、大学から就職を経て小樽に入ってきたら違ったイメージを持ちませんでしたか。

(小川さん) 僕らくらいの若い世代から見てレトロで、遊びに来やすいというイメージはありました。来てみてそういうお店も多いですし、観光として来て楽しいのですが、住んでみると意外と住んでいる人の遊び場がないですね。特に若い世代の遊ぶ場所が、たとえばカラオケくらいしかない。そういったアミューズ的なちょっと遊べる場所、すごく簡単などころではインターネットカフェでも、小樽では朝里まで行かないとないですから、そういうものがちょっと弱い気がします。

あとは、お店の閉まる時間の早さですね、飲食とか。観光目線からするとそのへんが弱い。泊まった人が遊びづらいですね。それでも小樽はライトアップをしていたり、お客様のにはいっぱい歩いてみたい。ところが歩いたところで、ちよくちよく店が閉まっている。それが意外と聞く話なので、僕らは「夜も人力車は走ってます」と言っています。楽しめる場所はあっても、もう少しほしいなというイメージはあります。そうすれば若い世代の子も、札幌まで行かずに小樽で楽しんでという感じが起きるんじゃないかと、うちの若い人を見ていて感じます。

雪に関しては、仕事上はそんなに問題はないです。タイヤ自体はソリでも構わない人力車なので、僕らの足の裏にスパイクを履けば、FF＝前輪駆動ですから、僕らさえ転ばなければ何とかなるだろうと。ちょっと大変なときは隠れて後ろから押ししたりしていますけどね(笑)。

観光客の皆さんは、雪路で歩けなくて、雪だからこその上の景色を見ないで、下ばかりを見ている人が多いんです。だから僕は、「足下を見ないで景色を見ましょう」ということで案内をしています。雪の景色はすごくいいものが小樽は多い。古い建物が多いので、本州の建物との差を見せてあげやすいというか、こちらだと三角の屋根があるから、雪を止める棒があったり、つららがあったり、そういうものが生々しく見られる。そういう意味では冬もすごく楽しいし、本州から来た人の目線からすれば、見せ方を変えればどこを見ても遊園地みたいな感じに見えると思います。そういった遊べる要素がない分、ほかに足を運べないかなという感じがします。あと、お酒をたしなまない人の場所が意外と少ないですね。

(中松会長) 私は、現在小樽商工会議所にいますが、以前銀行に勤務していたものですから、18回も転勤をしまして、小川さん、菅原さん、外沢さんの出身地である横浜、仙台、旭川にも住んだ経験があり、勤務もしておりました。

私は、昔からとにかくどうしても商業のまちとしての小樽に勤務をしたくて、最後の最後、平成8年に念願かなって小樽に勤務させていただきました。今から12年前、ちょうど私が50歳くらいの時でした。それと、実は、女房と娘2人も小樽大好き人間でして、その大好きなところに住んでいるお父さんお母さんは幸せですねと、そういう評価をしてもらってます。

④「移り住んでみて良かったなと思う部分」はありましたか？



(菅原さん) 仙台に長く勤務をした関係で、当時の仲間が、先輩、後輩とたくさんいて、会うたびに「いいところに住んでますね」と言われますが、自分の気持ちでここに住みましたから、そういうふうにいわれることはいいことだなと思ってます。あと、趣味の問題もあって、私は魚釣りをするものですから、海岸が近いとうれしいです。小樽というよりも、この近辺と言った方がいいのか、海、山、川もあり、食べ物もおいしい物がありますから、生活面では不満は何もありません。

(外沢さん) 私は、こっちへ来てお話しする相手がほしくて、移住のそういう方と仲良くなったのですが、その方と異口同音に、「小樽の人は本当に小樽の良さをわかっていないね」という話が出るんです。こんなに素敵な場所なのに、決して普段ごとのようにしか思っていない。もっともっと磨き上げて、いろいろなことに活用しようかという動きが見えない。

私のジャンルからすれば、美術関係に携わって絵を書く人や工芸をやっている人がたくさん小樽にいますが、横のつながりはといたないんです。小グループで何々会とか言ってやっていて、隣を見たらまた同じようなことをやってるんだけど、それをもっと膨らませることが意外とない。これはもったいないですよ。もっとチームワークを組んで、広域でそういったことがきくようになれば。

その一つとして、教育委員会がアーティストバンクをやり始めましたけど、ここに参加する方がアクセスをしているかという、そんなにしていない、放任状態の格好です。ああいうとっかかりを作ったら、もっともっとそれを持ち上げていく格好での動きをやらなければならない。どうも思いつきがいいが成長、育てることが苦手みたいですね。裏を返せば、歴史のある街はたいてい「しがらみ」でつぶされるが、そういうことになれちゃっているからそうなっているのか、その辺を打

破していかないと。

小樽はこれだけ歴史の遺産を持っているわけで、それを活性化させてもっともっと活発にしようと言いながら、観光のある狭いエリアだけは古い建物保存等をしっかりやっていますけど、ちょっと外れると人が足を踏み入れないレベルです。だけど、何々遺産とかプレートは貼ってある。

もっと広域に小樽という街を知ってもらう必要がありますね。それは、よそから来る人をターゲットにするからそうなるのであって、市民でも知らない人がいっぱいいるはずですから、そういう人たちが巡るといふか、そういうところに行けるチャンスを作って、もっともっと市としての財産をアピールしていかなくちゃいけないんじゃないかと思えますけどね。

(小川さん) そうですね、小樽のいいところ、いっぱいありすぎてわかりません。

まず、小樽は水がおいしいですね、N O . 1 ですね。いろいろ飲んでいますが、水道水を売れるくらいのところは、ここくらいしかないんじゃないでしょうか。僕は観光の時に必ずネタとして言わせてもらっています。それくらい水がおいしい。もともと「オタルナイ」という言葉はそのような語源から来ていて、水がきれいということは自然が強いまちなのかなと。商業が発展したところで自然が強いから、アイヌの人がそういう言葉をつけたのだらうと僕は思います。だから、食べ物もおいしければ、緑も残っていますし、そういうところを、もっともっとアピールしてもよいのではないかと思います。本当に水はおいしいなと感じます。

あとは観光エリア以外の古い建物をよりよく見せるだとか、やはりレトロな街小樽というのは誰もが思う言葉だと思うんですけど、ちょっと外れるとそのレトロが壊れたままであったりとかで、ちょっと寂しいですね。こっちは違うエリアなのかなと言って、足を運ばない人も多いです。

全体にそういうレトロな雰囲気が広がれば広がるだけ、街の人も歩きやすいし、街の人の意識も変わると思うんです。そうすると、移住したときでも、そういう街に住むということで誇れるし、自分が住んでいるエリアも、ちょっとレトロな通りがあると、「実はこっちの方が穴場だよ」「住んでいるから知っているんだよ」と、そういった話しも会話に出ると思うんです。メインのところにも行きたいでしょうし、ただ住んでいる街並みもいいよと、そういったことは重要ではないかと思えます。

(司会) みなさんからのお話で共通しているのは、小樽の人は「宣伝べた」というところなのですかね。いいところがあるのに、入り込まない、見ない、だから観光客の皆さんが来てもなかなか声をかけられないとか。案外そういうことが目につくし、そこが変わっていくと小樽は良くなるのではないかと、そういう示唆をいただいたと思います。

蛇足になりますが、先週の土曜日に、時の人、自民党の幹事長になったばかりの麻生さんがグランドホテルにお見えになって、「小樽の人は小樽の良さを知らない」とおっしゃってました。「自然の港を持っていて、14mの岸壁を持っているこういう中堅都市はないんだよ」と明確に言われます。

でも、小樽生まれ小樽育ちの僕が、改めて菅原さんのように「いいところに住んでるよね」と言われても、「何が？」というふうになってしまいます。外の人からの目というのは、ここがいいからいいんじゃないかと、そういう意味で言ってくれてるんじゃないかと思うんですけど、我々は、「小樽はいいところだよ」と言われても、なんとなく一瞬たじろいでしまいますね。



⑤ 「雪のことも含めて、生活してみても困ったこと」を教えてください？

(小川さん) 雪というのは重要なことだと思います。住むに当たってたぶん夏は全国どこでも一緒ですけど、「冬って大丈夫なの？」とよく聞くんです。それで意外と分からないのは「凍結」とかですよ。「水道の水抜き」(凍結による水道管の破裂を防ぐために、就寝前や長期外出時に水道管の中の水を空にすること。)という言葉は、こっちに来て初めて聞いたんで。「破裂をさせる」(気温の低下により水道管の中の水が凍結・膨張し、水道管に亀裂が生じること。)とか、全然意味が分からなかったです。そういうところを教えてあげるといいんじゃないでしょうか。水道凍結は、除雪よりも怖いですよ。大丈夫だろうと思っていても破裂しちゃう。何度かやっちゃいましたね。雪はどかせば何とかできるけど、凍結はそうはいかないよと、水を抜かないと。

たとえば古いトイレだと汲み取りができないとか、そういったところのポイントも教えてあげるといいですね。雪のイメージがあっても、その付属するもののイメージがわからないはずなので。当たり前だろうというところがあるところがあっても、トイレに不凍液を入れるだとか全然それも知らなかったんで、「ああこういうのもあるんだ」「これでなんとかなるんだ」という安心感はあるんじゃないでしょうか。

(司会) やはり視点的には、訪れる、住まわれる方に対しての「半年間の不安」ですね冬は。

(山崎オブザーバー) 市では転入する方用に、小樽での暮らしのマニュアル本みたいな「市民生活ガイド」というものを配っていますけど、どちらかというと今言ったような意識では書かれていなくて、一般的なことしか書いてないんです。そういう意味では、冬の備えみたいな項目も必要かもしれませんね。

(外沢さん) 結局、住むためのハウツー本ですよ。北海道に来るときに雪があるから行きたいんだという人もいます。しかし、いつも楽しいのかといたら、そうではないだろう、そういう時にどうしたらいいのだろうということが出てくる。そのときに、こちらではこうやってするんですよと、こういう機械と、こういう工具と、それからこれくらいのお金が必要ですよと。そういうところのノウハウ、ハウツー本みたいなものが必要なのかなと思います。

(山崎オブザーバー) 雪に対する知恵なんかも、こういうやり方がいいですよとか教えてあげないと、ただむやみやたらに雪を投げても効率が悪くて疲れるだけです。スノーダンプ(スコップに比べて大量の雪を運べる手動の除雪用具)を使った方がいいとか、こうやって積んだ方がいいとか教えてあげた方がいいですよ。



(司会) 恥ずかしながら、こういう機会がないと気づかされないというのが、小樽人の意外に呑気なところかもしれないのですが、雪の地域に住むためのハウツー本みたいなページがHP上があれば、案外小樽は親切だと思ってもらえるかもしれないですね。

⑥ 「本日出席の研究会メンバーからも、いろんなことを聞かせてください」

(藤田監事) 隣近所が見ず知らずな中で、コミュニティーを築くというところに関して、何かご苦労した点がありましたか？

(外沢さん) 私が非常にラッキーなのは、ある雑誌の取材の関係で、市役所から対応を依頼されて、お話をさせていただきました。すると、縦つながりから横つながりになっていきまして、いろんな方とお話ができるようになって、それがとても良かったなと思っています。3年前から開催している「ビズ・サイエンスカフェおたる」に参加することによって、さらにいろんな方とお話ができるようになりました。

(小川さん) 観光の方からどんどん繋がるのはありますけど、僕は全く知らないまま来たので、同世代の人でも知らなければ、観光エリア以外の人には全く分かりません。以前うちにいた仲間に繋がりを教えてもらって、それで少しは面識ができていきましたけど。

それと、小樽の人のいいところは、はじめは警戒した顔で見て「え〜っ」という顔で必ず見ます、ほとんど必ず。その代わりしゃべってみると、「あーいいじゃん、仲良くなろうよ」と、向こうから言ってくる、そういう気質はすごく小樽の人に共通していますね。必ず鋭い目で見ますね、見られた後に「おまえいいじゃんか」、その感覚が僕は好きですね。それで仲間にしてもらえるケースが多くて、逆にそういう意味ではちゃんと見てもらっているんだなと感じます。

ただ、観光の人達の集まりに呼んでいただいて、少しずつ繋がらしてもらっていますが、まだまだ一般の人達とのコミュニティーはほとんどないで、これからは一般の企業の人ともっと話せる機会があれば面白いのかなと。小樽の「観光じゃない見方」というのを、観光をしている者としてはほしいんですね。住んでいる人の本当の目線というのを知りたいし、それを知ってるからこそ観光ができると思うんです。生活してる人がいなければ観光は成り立たないことなので、そういった意味では非常に興味があるところです。そこのコミュニティーはほしいなとも思っています。

(司会) 私は、えびす屋さんのコミュニティーの作り方は非常にいいと思っています。当初始めた行為が、あの広範囲な観光エリアの掃除でしたね。あれは、いち早くコミュニティーとして市民に受け入れられました。どんなことをしても必ず賛否両論が出てきますが、えびす屋さんのあの行動は、市民の中に飛び込んだ一つのきっかけとしては素晴らしいことだったと思います。

(赤間副会長) よその町の人とふれあうということについて、同じ趣味や、近所の人との関係で何か経験があれば聴かせてください。

(外沢さん) 私の場合には娘とか、女房とか先発隊がいて、いい時に私がポンと行っただけなので、私自身の努力はそんなにはないですね。そういういい場面に自分が入れたきっかけは、女房に中古の家を買って、そこでちゃんと腰を据えた生活をなささいよと、それが良かったんじゃないですかね。

私は横浜に暮らしていましたから、よそから見ると女房は未亡人みたいで、どうしても手助けしたくなるんじゃないですか、狙った訳ではありませんけどね（笑）。そういうのも良かったんじゃないのかなと思います。

雪のトラブルとか、もめ事の報告もありましたけど、やはり腹を割ってやってみると意外といい人だというのが分かったと言ってましたね。

(菅原さん) 仕事の関係から私は転勤しても仲間がいたわけですが、うちの家内の方は心配でした、誰もいないところに日中いる訳ですから。それで家内は、転勤するとどこでも市民文化センターなどのサークルや北海道新聞さんのサークルとかに顔を出して。今ここでは卓球をやっていますけれど、仲間が増えて3つも4つも顔を出しています。麻雀のサークルにも行ってまして、ここでは家内の方が顔が広いくらいですね。

私はこちらに来て、たまたま職人の会というのがあって、そこに顔を出すようになっていますが、札幌でも4年ほど仕事をしていたものですから、その時の飲み仲間もいます。異業種の交流会にも入っていて、来る仲間は様々で月1回集まってただ飲んでいただけですけど、いろいろ話しているうちに仲間が勝手に広がっていきます。

でもやはり一番は、家内の方が最初の入口でいろいろ苦労してたんだと思います。それを、文化活動からとっかかりを作っていたということですね。

(赤間副会長) 風俗、習慣、カルチャーショックみたいなものはありましたか？

(菅原さん) ないですね。

(外沢さん) 閉鎖的ではないですね。

(小川さん) グループにはなりますね。こぢんまりとしたグループ作りがうまいですけど、そのリンクがないですね。「おまえらのグループは」みたいな感じが非常に多いですね。それが小樽のいいところでもあります、ちょっと悪いところでもありますね。

(菅原さん) 誰かが声をかけてくれば、必ずくっつくのですが、そういうところで声をかける人がいない。そういう点では、私らみたいな転勤族が行くと珍しがって声をかけてくるので、それが結構くっつく感じになるのだと思います。

(外沢さん) 佐渡には30有余の能舞台があり、その多くが今でも使われています。生きた舞台になっている理由は何故なんだろう。自治体の支援もさることながら、佐渡の人々の能に係わる特殊性が一番の理由ではないでしょうか。小樽市は歴史的文化遺産を持っていて、それを活性化するために、例えば地区ごとにボランティアなどで、いかに歴史的建造物を守っていくかというような活動も面白い。その価値を判断するのは観光客の方で、どれだけ自分たちが整理した建造物に来てもらえるか、そういう活動もこれからは必要ではないかと思う。ボランティアも、他人の家の庭で草刈りとかではなくて、もうちょっと心の中をくすぐるような、文化的なことをやるというのも、ボランティアのやり方ではないかと思います。

(山崎オブザーバー) 古い話ですが、「おたる潮まつり」は、30数年前は40町会ほとんど全部の町内会が梯団として出でいたんですよね。つまり町内会対抗だったんですね、それでお祭りが非常に盛り上がったんです。今でも古いお祭りで盛り上がっているところは、地域ごとに出てるんですね、山車を出したりとか。ところが、現在の潮まつりというのは、残念ながら町内会がほとんど出られなくなってきて、企業単位でしか出られなくなって、祭りとしての質が変わってきてますね。

(外沢さん) 潮まつりをどれだけ盛り立てるか、小樽の唯一の祭りだという構えの切り口でいけば、もう少し

やり方が出てくるでしょうね。決して放任主義で栄えることはあり得ない、援助隊が手をさしのべないとダメだと思います。

(山崎オブザーバー) いまだに100人とか出てくる町会がありますから、その地域というのは、うまくやる人たちがちゃんといるんでしょうね。

(小笠原理事) 移住してきた方同士の情報交換はあまりされないですか？

(外沢さん) 必要ないと思います。というのは、小樽に来ようという共通点はあるけれども、どういう目的で、どのような価値観で小樽に来たのか、それぞれ違うということなので、その価値観の違いを根掘り葉掘り聴いたところで、仕方がないんじゃないかという気がします。それであれば、小樽に入って、小樽で実績を積んだ生活したという経験の元でお会いして、そこから発展していくということですよ。もう「小樽人」なのですから。

(小笠原理事) 将来的なことですけど、後から来た方がそういう場に行けば、既に何年か前に来ている方の情報があって、あるいは直接お話ができ、さっきの冬の問題なんかの情報もすぐに得られるような、困ったことがそこで解決するような、そんな場所があればいいなと考えてるんですけども。

(菅原さん) それは、こういう研究会みたいなものが間に入っていただいて、それで我々みたいなところに、「こういう問題だったらあの人に聴いてごらん」というような、橋渡し役をやっていただいく形で受けるのであれば、できると思います。しかし、何でも来られたら生活できなくなってしまいますので（笑）。

(赤間副会長) 札幌や後志圏をどのような目で見てますか？

(菅原さん) 札幌には行きますけど別に何とも思っていないですね。小樽に何か不満があるとすれば、仙台とかに帰るときにお土産を持って行きたいんですが、小樽を思わせるようなものがあまりないことですね。北海道のはいっぱいありますよね。でもせっかく行くんだったら、小樽だとか、後志だとか名前のついたものを持って行きたいが、なかなかない。それで、空港や札幌のデパートで買ってくるとか、あとは遊びに行くだけで、札幌はそういう場でしか見ていないです。後志も同じだと思います。買い物に行くことはありますけど。

(小川さん) やはり、小樽よりは札幌は都会というふうに見ています。昔は小樽の方がすごかったんだろうという目でしか見ないですが。後志の奥の方に行くとなると完全に田舎だと、交通機関的なものが弱いなと思います。

あと、小樽はそこそこかい街なのに終電、始発が少ないというか、もう一声、もう1時間というところがあります。そういう部分が、小樽をもう少し都会にしていないのかなという気がします。どうしても終電時間が早いところは田舎だという見方をすると思うし、それは全国一緒だと思います。そういう意味では札幌は遅くまで動いているから都会だなと、お店が開いていたなら小樽は都会というか、発展している街に見られるのかなという面はありますね。

よその観光地に行っても早いところはめっちゃめっちゃ早いですから。京都なんかは早いですね、お寺と一緒に同じ時間に4時、5時に閉まりますから。それでも観光の人が行くというのは、完全

に田舎と認めて行ってるのかなと。

逆に小樽の場合は期待してて、そこそそレトロで夜も遊べてというイメージで、ライトアップもしているし、そういう目線で見ているから、じゃあ夜も栄えているはずだと勝手なイメージを持っている人が多い。生活をしている側からすれば別に何も問題ないじゃないですか、5時、6時に店が閉まっても、当たり前だろうと、そういう感覚になりますよね。そこの差が大きいんじゃないかな。

(小笠原理事) この研究会では、移住の一つのキーワードとして、「生活する観光」を掲げて、小樽の中で時間が流れていく部分をゆっくり体験してもらおうという新しい観光のあり方みたいなものを、移住に中に入れて検討しています。そうなったときには、観光のお仕事をされてる立場としてはどうですか？

(小川さん) そうですね、僕らのくるま屋業でいうと、走れるエリアしか案内できないので、幅が狭まります。それでも走れるエリアは水族館からマイカルまで走りますので、全然問題がないといえませんが、それ以外でも走ります。僕も現役の頃は、高商（現小樽商大）まで人力車を上げさせたことがありましたが、次の日はひどかったです（笑）。

ただ、長い時間小樽にいる人にとっては、小樽って遊べる場所が観光的要素で多いはずなんです。まず港があるんで海ですね、海水浴ができます。銭函の方とか、あのラインに行っただけ海水浴できるところは、他の町にはないですから。小樽の海水浴って普通にバーベキューするでしょうけど、そういう目で観光に来ている人はいないでしょう。小樽に来て海に行こうという人がいないのはちょっと寂しいのかな。「船に乗ろう」は分かるんですが、「海遊びをしよう」という人はほぼゼロに近いと思います。水族館まで行く、景色は見るけど海遊びはしない。それを提案したらもっともっと広がるんじゃないかと。

あと小樽に来て本当に観光、レトロだけなんで、例えば遊ぶところでいったら、山登りも小樽はできますし、スキーもできますし、ゴルフもできますし、実は結構遊ぶところがあるんですよ。ただ、「小樽に来てまでやるの？」というイメージを持っていて。だから、「住んだ人」にこういう遊びができるところがあるというのを知らせておいたら、「結構あるじゃん」「家族で来ても遊べるじゃないか」という類の打ち出しができて、いいんじゃないかと思います。キロロも近くにあるし、スキー場は目の前にあるし、生活して家族で遊びに行く場所が市内にはすぐ近くにあると思います。

札幌はただ買い物で終わってしまいます。小樽の方が自然が残っているんで、「海、山、冬遊び」何でもできると思う。ただ、それを知らない人が外から来ると考えた場合は、ほぼそこを見ていないということです。

「⑦ 行政に対する望むこと、小樽市民に望むこと」はありますか？

(菅原さん) 研究会で考えてる長期滞在は、いろんな物をくっつければいくらでもあると思います。職人の会の体験は小中学生が対象ですけど、大人向けのものも考えればあるわけで。先ず住むところを考えて、どれくらいの料金であれば来れるのか、だいたいご夫婦でくるのでしょうから、そういうものを出していけば、ふれあいどころを考えることができると思います。

(外沢さん) 大正天皇が皇太子の時に泊まりになった、「御宿泊所」(能楽堂が併設された小樽市公会堂のこと。)で展示会をやったんですが、床の間にある2本の床柱に木ねじがついてるんです。管理している方に聴いたら、茶会の人がお花をつけるためにつけているということで平然として言うわけなんです。市として指定建造物に対して、してはいけないことの条項は持っていないんでしょうかね。岡崎謙さんの方から受けた衣装にしても、地下の湿気の多いところで展示してある訳で、あれでは維持できないですね。お金がなければなりやり方があるのではないかと思います。要は活用するにしてもやり方だと思います。大事にしている物を、「どうぞ使ってください、そのかわりこういうことは守って皆さんで使ってください」ということだと思ふ。

(小川さん) 古い街のものを残してほしいというのは、観光の目からもあります。あともうちょっとトイレを増やすか、整備をお願いしたいです。僕らの観光エリアもそうですが、他のところにも意外とないですね。旭川に住んでいたときに、北海道は凍結があるからトイレを置けないという話を聞いたことがあるんで、そういうのが関係あるのかとは思いますが。

(司会) 大変残念ですが時間になってしまいました。今回は、試行錯誤の中での懇談会でしたが、今後、新しい意見とか、新しい角度から見た芽が出てくるかもしれませんので、今日をきっかけに、違った業種の方とか、違った文化をお持ちの方を加えて、次の会に発展していきたいと思ふます。
私どもにとっては非常に貴重な時間だったと考えております。それでは、最後に赤間副会長からご挨拶をさせていただきます。

(赤間副会長) 今日は貴重な時間をちょうだいしまして、ありがとうございました。
やはり期待していたとおり、我々だけでは出てこないような、「見え方」みたいなものをちょうだいして、ありがたく思ふます。HPなんかを見てますと、頭の中で交通整理したような移住促進策みたいなものがよくあるんですが、本当に住んでいる皆様の、リアリティみたいなものをちょうだいして、それを埋め込んでやっていきたいと思ふますので、これからもどうぞよろしくお願ひします。本日はどうもありがとうございました。

